

新 紹 介 刊

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth Not
to be though expert in both.

「文学的回想」

マルタン・デュ・ガール著・店村新次訳
(法律文化社・A5判・二九一頁・七八〇円)

昨年の春、M・デュ・ガールの処女作「生成」を訳出された店村新次教授が、学園紛争に伴う悪条件と戦いながら、困難な訳業を見事に完成し、再び世に問われたのが本書である。あの永遠の青春小説「ティボー家の人々」以来、M・デュ・ガールの名を青春の導師として脳裡にかくく刻みながら、(個人的なことを語ることを好まないデュ・ガールの主義のせいもあって)その人生の個人的側面については、殆ど知ることができなかった彼の愛読者にとって、これ

以上ありがたい贈物はないであろう。しかも店村教授は、長年、作者の研究にうちこんでこられたかたである。果して本書は「文学的回想」のほか、デュ・ガールが恩師のためにものした美しい「証言」をはじめ友人や医師の追想を収め、デュ・ガール文学研究の分野で定評のあるアルベール・カミュ(M・デュ・ガール論)とドミニック・フェルナンデス(ブルーストカM・デュ・ガールか)の長篇論文二点を加え、最後に訳者が独自の立場から、全作品の成立過程とその意義を改めて展望解説するという周到さである。こうして本書は、彼の文学の愛読者必読の書であるのみならず、彼の文学の研究者にとって欠かせぬ文献となっているのである。

その主義とあくまで謙虚な人柄のせいであらうか、本書でも身近の重要な事件、たとえば結婚、家庭、ノーベル賞受賞、などに関する記述は、驚くほど簡潔である。この点、いささか物足らぬ感じがしないわけではないが、訳題文学的回想(原題では自伝的・文学的回想)が示すように、文学修業上の苦勞に関する回想は詳細をきわめ、彼

の文学制作の秘密が、これ以上ない程の素直さで告白されている。この作家は、少年時代から才気にまかせて書きまくることを排し、主題に応じたいくつかのプランを用意して、慎重に筆をすすめる方法を採用しているが、古文書学院での学習がこの方法をさらに強固なものとして、大作「ティボー家の人々」も「回想」後半の焦点をなす「モーモール大佐の手記」(未公開)もカードとノートの徹底的整備ののち、世に生みだされたのである。しかし彼がああ「ティボー家の人々」の「ただの一行でも、わたしの目の前にできあがっていなかったものはない」と言いきるとき、誰が驚かないでおられようか? 調和、明晰、堅牢、優雅など、フランス文化の特質のすべては、こうした地味で堅実な不断の努力と無縁ではない。いや、それらのすべてが「孤独で、力強く、執拗な専心によつてはじめて得られる奇蹟」であるという彼の信条告白に接するだけでも、本書をひもとく価値がある。大方の読者に推薦する所以である。

(工学部教授・前川道介)

「松山高吉」

溝口靖夫編著

(創元社・B6判・三四〇頁・七〇〇円)

著者神戸女学院大学学長溝口博士は長年同大学の図書館長であつたので資料に詳しく、また同志社や米国で神学を修め、かつ女学院には松山翁の令嬢初子女史もおられ松山伝の執筆には最適者であろう。本書はまことによく松山高吉を伝えていると同時に同志社史の好資料でもある。その概略を紹介しよう。

序文において湯浅八郎、佐々木二郎、柳原貞次郎の三氏がそれぞれ翁の人となりを述べておられる。

高吉が儒学、俳諧、茶道に通じた父祖の血をうけ、自身も国学によって古道を探求した。しかも一族中には医を志す者相次ぐ有様で、松山家には自由進歩の風も強かった。この気風が後に基督教を受け容れる下地となり、ついで国学者仲間から派遣された探子松山がかえって基督教こそ神道のまだ達し得ないところに到達した宗教である

と見て、断然受洗した次第が「福音との出会い」に記されている。

こうして召されたユニークな日本の基督者松山には彼に最適の仕事が待ち受けていた。それは聖書と訳と讃美歌編集の業であつた。

「松山高吉は、何よりも聖書の和訳に当つて陰の力となつてつくした人であり、特にその優れた日本語の表現力をもつてのことに貢献したのであり、彼はこの意味で、まさに、美しき日本語による御言の伝達者と呼ぶにふさわしい」(五頁)と著者は言っている。彼は明治・大正を通じて前後三回各派共同の聖書と訳とその改訳に関係した。米国聖書協会は「彼は聖書の翻訳に正しくその最初から一九一七年新約聖書の改訳完成まで参与する名誉をもち得た唯一の人であつた」と称賛感謝の辞を呈したことを本書は紹介している。讃美歌編集においても彼の国語や和歌の知識が非常な力となつた。彼自信の作詞になるものもある。五九、四〇〇、そして天皇が感激されたと伝えられる四一五、今の讃美歌にはないが「あまつみくらにましまして」がそれである。

次に本書は松山と新島及び同志社との関係について詳述している。新島の帰朝早々横浜のグリーン氏宅の午餐の席で出会つて以来親交を深めた。「裏」の字を考えてくれたのも彼であり、同志社を京都に創設することについても「東京は政治の都、大阪は商業の都、京都こそ教育の都と二人の意見は一致した」(八頁)。松山は明治十六年社員(理事)として正式に同志社に関係して以来、仮教師、講師、資産管理委員、同志社病院と京都看護婦学校の発起人、社長代理等、明治四十四年満期で理事を退任するまで続いたことを述べ彼の同志社に対する功績の数々をあげている。

平安女学院での教育活動、牧師としての神戸公会、平安教会での働き、あるいは日本基督伝道会社長に選任の事も述べている。

令嬢松山初子女史の「亡き父母の想い出」は家庭における翁夫妻のよき素描である。巻後半の遺稿と年表は貴重で、特に「旅日記」は同志社にとつても重要な資料であらう。

(加藤 延雄)

「僕アホやない人間だ」

福田達雨著（止揚学園園長）

（柏樹社 B6判・二七〇頁・五五〇円）

明治時代の留岡幸助、山室軍平はもとより同志社は今日まで多くの社会事業に働く人を世に送り出してきた。

これらの先輩には同志社に育ったものとして共通に流れている一筋のものがあつた。しないかと一読して思った。

社会事業に働く者は社会に対する態度、人間観、そして自己自身との実存的対立において、決断的に一つの立場をとらざるをえない。この立場こそ彼の仕事の内容を規定し、仕事へのエネルギー源となる。

重度精薄児の教育にあたる著者は、「しなければならぬんだ」という内的必然性に押し出されて、残飯をもらい歩く「乞食」生活の準備期間を経て、昭和三十七年、滋賀県登川に「止揚学園」を建設する。いや、精薄児と世間ではレッテルをつけて差別するが、まさしくひとりひとりが、かけがえない人間である彼らと「パシンパシ

ンとぶつかって火花を散らす」人間関係を展開する共同生活を始める。

一般社会では、役に立つ人、能力ある者ほど値うちがあるという尺度で、自分も他人をも評価しがちである。このような尺度で重度精薄児を測つたらどれだけの値うちがあるということになるか。この本はそういった人間の価値観への真剣で明るい実践的抵抗の書である。抵抗のホコ先は世間一般にのみ向けられているのではない。「死んでくれてよかった」と嘆息する精薄児の親たちへ、自らの人間としての可能性と尊さをいまだに知らない精薄児に、そして、これらの仕事に「焼け石に水」のような無力感と無意味さを感じようとする著者自身と、施設に働く同労者にも鋭いホコ先を向けるのである。「アホやない。人間だ。」

偏見の中に埋もれた可能性を伸ばし、人間として認めさせる「人間の回復」は人格と人格とがぶつかり合う関係の中から勝ち取るものだと言著者は証する。

「教育の土方の仕事」をするという姿には民間社会事業の意義と社会事業従事者像とに示唆するところがある。建物や設備や法

律よりも、もっと大切なものは人間の心の尊重とこの子供たちへの連帯責任感が社会の中に育つことであり、「子供の自由と権利を守るための防波堤になる」ことが、施設に働く者の任務であるというのである。

人間の生活を規定し、精薄児の問題を社会の問題たらしめるもの、つまり、社会の構造と歴史の動きに対してわれわれは無関心ではいけない。ただ、著者が精薄児の心を大切にされるゆえになおのこと、心と社会の問題を含めたトータルな範囲での現実認識と発言が聞かれないうのを惜しいとも感じるのである。

（昭和三十六年・大社卒・保田井 進）

